

Title	ドルガン語の成立過程について-言語接触の観点から
Author(s)	藤代, 節
Citation	神戸市外国語大学外国学研究. 1990, 21, p. 155-184
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/16056
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ドルガン語の成立過程について

—言語接触の観点から—

藤 代 節

0. はじめに
1. ドルガン族とその言語
2. 言語接触とドルガン語
3. ドルガン語の語彙
4. ドルガン語の語頭子音 h
5. ドルガン語の命令形
6. おわりに

0. はじめに

北西シベリアのタイムル半島に分布するドルガン族の言語、ドルガン語(долганский язык)は、これまで単純にヤクート語の1方言と考えられてきた。しかしこの言語は周辺に位置するエベンキ語などのツングース諸語やロシア語、さらにはガナサン語などのサモエド諸語のかなり大きな影響を被りながら成立した一言語であって、その取り扱いはかならずしも容易でない。ここでは、ドルガン語の成立過程におけるこれら周辺諸言語との接触の痕跡について、とりわけドルガン語とヤクート語の相違点に注目しながら考察してみたい。

1. ドルガン族とその言語

1. 1. ドルガン族

ドルガン族は、1985年の資料(Бромлей 1988: p. 543~4)によると5,300人を数える北方シベリアの少数民族である。自称としては *tia, tia kishi* (共に「森の人」の意)等を用いる。ドルガン族は、チュルク化したツングース族といわれ

ることがあるが、詳しくは、17世紀にオレニョク河、レナ河流域に住んでいたいくつかのエベンキ族出身の氏族、即ち、エジャン Элян、ドンゴト Донгот、カラント Каранто、ドルガン Долган という氏族がタイムル半島（後掲の地図参照）に移住し、隣接するヤクート族、更には、先住のサモエード族、ロシア民族と共にこの民族を形成した⁽¹⁾。その形成時期は、18世紀末から19世紀とされる。クラスノヤルスク地方ドルガンネネツ民族管区内、タイムル半島に現在も住んでいる。その伝統的産業は、狩猟、漁猟とトナカイ飼育である。集団農場に加わっている者も多い。

行政・司法及び教育の諸機関では、ドルガン語は、実質的には使用されていない。初等教育への就学率は、1970年の資料では、1,000人中375人である。ドルガン語は、正書法を持たず、文語としてはヤクート語文語を用いる⁽²⁾。識字率は、1970年の資料で99%に至る⁽³⁾。

宗教は、ギリシャ正教を受け入れているが、伝統的にはアニミズムやシャーマニズムを信仰している。

1. 2. ドルガン語⁽⁴⁾

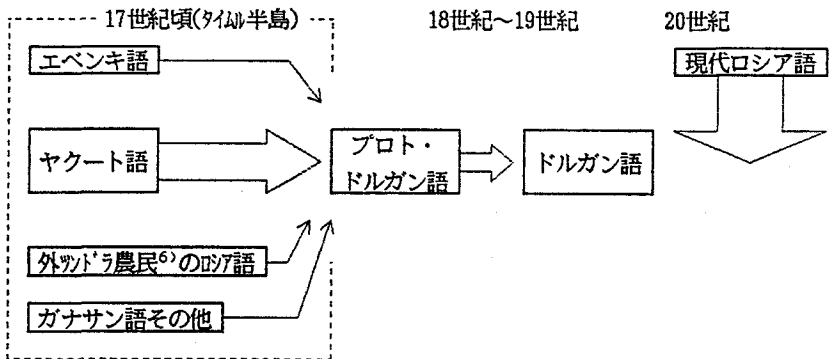
ドルガン族は、一般にヤクート語の一方言とされてきたドルガン語を使用する。ヤクート語は、チュルク語の中にあって単独でグループを形成したり、あるいは、トヴァ語やハカス語と共に東北グループの一員に加えられる言語である。ところが、近年、ヤクート、ドルガン両言語の間ではすでに相互の理解が困難となっている。その理由は、一つには、ドルガン語の分布が標準ヤクート語のものから地理的に遊離していることとされる。しかし、一方では、ドルガン語の形成にその理由を求めることもできる。

民族としてのドルガン族の形成時期が、18世紀末から19世紀であるとする、ドルガン語の成立時期もこれとほぼ同じと考えることができよう。1930年代に行われた Убрятова, Е. И. の調査によれば、ノリリスク（地図参照）のドルガン人の大部分は、自らを尚、エベンキ族の出身であると自認し、その言語は、

ドルガン語、エベンキ語と二言語併用の状態にあり、母語としては、既に、ドルガン語を選択していた。従って、ドルガン語の形成には、ヤクート語を中心とし、それに、エベンキ語が、大きく関与したことが推定される⁽⁵⁾。更に、周辺に分布していたエベン語、ガナサン語、又、ロシア語などの影響も被っているに違いない。

ここで、興味を引くのは、ある言語から一方言が分岐し、それが発展して1つの言語になった場合とは違って、ドルガン語は、もともと相異なる複数言語が互いに、影響を及ぼし合い、その内の1つの言語即ちヤクート語が中心となって他の言語を同化し、やがて、本来のヤクート語とは特徴を異にした一言語に発展したという点である。

ここで、ドルガン語の成立過程を図において示してみたい。



ドルガンの名は、⁽⁷⁾ドルガン族を形成するエベンキ族出身の主要な氏族の名称の1つであった。17世紀にロシア人がレナ河流域に到着して以降、この名が知られるようになった。他のシベリア地方の民族の諸言語と同じく、革命前・後を通じて、ロシア人との接触がある。革命後は、特にソ連邦の版図の中にドルガン族が組み込まれ、ロシア人が多くドルガン族の住む地域に投入されてきたので、自然、ロシア語習得がすすんだ。1979年の国勢調査では、ドルガン語を母語とみなしている人口の割合は、90%であるが、72.9%がロシア語を第二言語

として自由に操るといふ(Центральное Статистическое Управление СССР (1984)).

2. 言語接触とドルガン語

2. 1. 言語接触の観点からみたドルガン語

ドルガン語は、既述のように系統の異なる言語を母語とする複数の民族がヤクート語を基盤にし、各々の言語を基層言語として、形成した言語である。従って、各々の民族においてドルガン語形成への関与状況には差異がある。それら差異は、各々の言語とドルガン語との接触の程度における差異ということになる。ハールマン(1985)は、如何なる言語接触現象に際しても、言語を媒介とした文化的要素の伝播、即ち「文化移入」が起こり、これが更に進むとやがては、本質的な文化変容が生じ、さらには「同化」、言語上では「言語取り替え」現象が起こるとし、図式化している：

言語レベル：言語接触→多量言語接触→言語取り替え

文化レベル：文化移入→文化変容→同化 (p. 85-86)

ドルガン語の形成に関わった民族語の主なものについてこの点を考えると、エベンキ族にとっては、言語取り替えの段階にまで進み、ヤクート族にとっては多量言語接触の段階に留まったととらえる。また、ロシア人の外ツンドラ農民にとっては、エベンキ族の場合と同様、言語取り替えに至ったことになるし、革命以降のロシア人入植者にとっては、ドルガン族の言語との接触は、彼らのロシア語にとっては、極些細なものであったであろう。又、逆に革命後のドルガン族にとっては、着実にロシア語との言語取り替えの段階に進みつつあることになる。厳密に言えば、言語接触の観点からみたドルガン語は、言語間の接触と言語の形成が同時に起こっている言語である。従って上にあげた各々の言語とドルガン語及びその形成に関わった言語の接触の仕方については、より複雑なのでハールマンの単純な図式をそのままあてはめて考えることはできない。

ドルガン語の成立をより興味深いものにしてしているのは、プロト・ドルガン語

に関わった諸言語の中には、ドルガン語形成において互いに「再」接触を経験した言語があることである。例えば、ロシア語が今日のように文化的社会的優位性を持って浸透していなかった間は、ヤクート語が中央・北部シベリア地方のリング・フランカとなっていたと考えられる。その状況下で、エベンキ語とヤクート語は、互いに接触し、後にドルガン語形成期に両者は、⁽⁸⁾「再」接触することになる。又、一方ロシア語は、ドルガン語形成期とそれ以降においては、かなり異なった接触状況を示す。昨今のソビエトの事情を考えると、ドルガン語のロシア語への同化は、進んでいく傾向にある。つまり、現在、ドルガン語とロシア語との接触は、ロシア語を優位言語とし、ドルガン語は、劣位言語の地位に甘んじている状況である。一方、19世紀末のドルガン語とロシア語の接触状態は、その逆である。今日のドルガン語には、元はこれら外ツンドラ農民の言語から当時のドルガン語に導入された語彙をはじめとする接触の痕跡がかなりあろう。

本稿では、言語接触によって形成された言語であるドルガン語について、ヤクート語とドルガン語の相違点(2.2.)に着目し、その起因するところを、言語接触と考える点について報告していく。

2. 2. ドルガン語とヤクート語の相違点

ドルガン語とヤクート語の相違点として、Убрятова, Е. И. は、以下のよう⁽⁹⁾な点をあげている。

ドルガン語がヤクート語と最も異なるのは、語彙の点においてである。これは、ドルガン語成立のプロセスと深く関わる点である (p. 48~74)。

⁽¹⁰⁾音韻について、主な相違点としては、語頭の位置において、ヤクート語の s がドルガン語では、h として現れている点がある (p. 31ff.)。又、母音調和についても、若干の相違が認められる (p. 21ff.)。

形態論上、比較的大きな相違点として、ドルガン語においては、人称代名詞に共同格 *совместный падеж* が欠けており、後置詞 *gitta* 「共に」(対格

支配) を用いて表すという点がある(p. 80~81).

例. ド (ドルガン語) *miñigin gitta* 「私と共に」

ヤ (ヤクート語) *miginnin* 「ク」(共同格)

時制については、相違点として次のようなことを挙げている。完了過去時制において、古代チュルク語の *-miş* にさかのぼる *-bit* により形成される過去形は、ヤクート語では、久しい過去 *давнопрошедшее время* (「すでに完了してしまっただか、発話の時点には、完了してしまっている」行為) をあらわす。ドルガン語では、この表現のためには使われず、「たった今 (一同の見ている前で) 完了した」行為を表す (p. 169).

例: ド. *kel-bit-e* 「彼は到着した」

この表現は、到着したばかりで、すでに家の中に入ってしまったような場合に使う。又、未来時制の否定形においても、ヤクート語には欠けている *-m* による否定形 (行為自体の否定よりも人称の否定に相当する形) をドルガン語は持っている (p. 171~2) という点も相違点として挙げられる。

例: ヤ. ド. : sg. I. *ah-ia-m* 「食べるだろう」

ヤ. ド. : sg. I. *ah-ia-m huog-a* 「食べないだろう」

ド. : sg. I. *ahā-m-ia-m* 「(他の人はともかく) 私は食べないだろう」

その他にも希求法・命令法等において、その形成・意味について相違点が認められる。

人称代名詞の属格は、ドルガン語にもヤクート語にも存在しない。ヤクート語は、主格形と人称所有接尾辞の結合によって所有表現を表すが、ドルガン語では、人称代名詞の代わりに物主代名詞を用いることができる。即ち、物主代名詞は、名詞の限定語となりうる。

例: ド. *miñiene ubaj-ım* 「私の兄」

物・代「私の」 「兄」所有接辞 I. sg. (p. 90)

例: ヤ. *min die-m* 「私の家」

人・代「私」 「家」所有接辞 I. sg. (*Я. На. СССР, II. : p. 413*)

以下では、特にドルガン語の語彙、語頭子音 *h*、及び命令形的をしぼって考察を加えていきたい。

3. ドルガン語の語彙

3. 1. 借用の問題

ドルガン語の語彙には、多くの起源不明の語彙が含まれている。その中には、ドルガン族が、他の民族と接触したことにより、借用した語彙も多かろう。借用語彙については、次の点を考慮せねばならない。即ち、借用された語彙の指示物とその借用よりも以前に存在していたか否か、という点である、抽象的な概念であっても、また、具体物であれば尚更のこと、新規に導入された事物に関しては、その語彙をそのまま借用する可能性は高い。その点からすれば、身体・親族名称、数詞などはその細分について程度の差はあろうが、あらゆる言語に、本来的に存在していると考えられる語彙である。従って、比較的借用されにくいものと考えてよかろう。だが、一方で、ドルガン語のように、その言語の言語共同体が成立するまでにその構成員の一部が、何らかのかたちで母語を捨てるという状況にあっては、逆にこれら借用されにくいとされる語彙に固執する可能性が高いはずである。それら語彙のうちには、ついにその語彙形式を形成過程にあったドルガン「標準」語の語彙に組み込むにいたるものもあつたであろう。

身体名称、親族名称、数詞などは、語彙のうちでも、セットとして扱えるので言語間で比較し易いといえる。本稿では、これらに方角名称を加えて観察を進める。

3. 1. 1. 身体・親族名称

本節では、身体・親族名称についてドルガン語とその成立に深く関わつたと考えられるヤクート語、エベンキ語との間の借用関係を観察する。

《身体名称》

	ドルガン語	ヤクート語	エベンキ語
脊髓	hutuka	sürün	xutuka
腸	hīlukta	ohoγos	xilukta, silukta
脳	irge	meji	irgə
頭	bas, meji	bas	dil
目	karak	xarax	āsa
鼻	munnu	murun	oŋokto
唇	uos	uos	xədjun 「上唇」 xəmun 「下唇」
齒	tis	tis	iktə
口	añjak	ajax	amŋa
胸	tüös	tüös	xikən
胃・腹	bīar	is	xukitə
足	atak	atax	xalğan
手	ili	ili	ŋālə
肩	arka	sarīn	mīrə
	《<ヤ. arγā 「西」「背中」》	《<チュ. jarīn 「臑甲骨」「肩」》	
耳	kulgāk	kulgāx	sēn
血	kān	xān	səksə

《親族名称》

	ドルガン語	ヤクート語	エベンキ語
父	aγa	aγa	amīn
母	ije, iñe	ije, iñe	ənīn
祖父	esja	ehe	amākā
祖母	ebe	ebe	ənəkā

おば	ed'ij	ed'ij	əkīn
姉	ed'ij	aγas	əkīn
兄	ubaj	ubaj	akīn
弟/妹	balīs	balīs(妹)	nəkūn
	baltī	bīrāt, ini(弟)	
子供	oγo	oγo	xutə
息子	uol	uol	xutə
娘	kīs	kīs oγo	xunāt
夫	er	er	ədī
妻	d'axtar	ojox	asī
	kös (〈チャガタイ kōč)		
継父	aγarān	kīrinñeγ aγa ⁽¹¹⁾	amīrān
	amīrān	māčaxa aγa	
継母	inerēn	kīrinñeγ ije ⁽¹¹⁾	ənīrēn
		māčaxa ije	

身体名称については、ドルガン語では、「脳」「脊髓」、「腸」に、エベンキ語の語彙を継承しているが、これらはヒトの身体名称としてではなく、トナカイ等の動物解体に際して、エベンキ語から導入された語彙であろう。他のものについては、ヤクート語の語彙を採用している。

親族名称については、詳細にみていくとエベンキ語の語彙の浸透が身体名称に比べて著しい。例えば、「継父」、「継母」の各々について、ヤクート語は、迂言的⁽¹¹⁾な表現をするのに対して、ドルガン語では、エベンキ語の語彙を借用している。Убрятова(1985: p. 59)は、ヤクート語には該当する語彙がなかったため、これら2つに関しては、エベンキ語を用いたと説明している。興味深いのは、ドルガン語に、aγarān「継父」、inerēn「継母」という形式があることである。これは、aγa「父」、iñe「母」をヤクート語から採用した後、エベンキ語の語彙からの類推によりつくられた語彙だと考えられる。これと並行的な類

推が、ヤクート語とロシア語の間でも見られる。即ち、ロシア語で「継母」を表す *mačexa* が、ヤクート語で *aγa* 「父」を組み合わせることで「継父」を表す表現となっている。

ドルガン語で「弟」、「妹」は、いずれも *balis*、あるいは、*baltī* で表すが、ヤクート語では *balis* は、「妹」しか表さない。一方、エベンキ語では、*nəkūn* 一語のみで、「弟」も「妹」も表す。これは語彙を取り入れるにはいたらなかったが、言語接触において、被影響語の話者が、影響語の語彙を再解釈した例である。同じことが、「妻」についても言える。エベンキ語では、「妻」は、「女性」を表す語彙と同じ語彙形式を用いるが、ドルガン語では、語彙形式自体は、ヤクート語で「女性」を表す語彙 *d'axtar* を採用し、ヤクート語ではその語彙形式では表さない「妻」の意でも用いる。

ドルガン語の親族名称は、そのほとんどがヤクート語の形式を採用しているが、それら語彙のドルガン語への組み込み方は、エベンキ語の親族名称の語彙構成をよく反映している。

3. 1. 2. 数詞・方角名称

数詞については、ドルガン語は、ほぼヤクート語と一致している。

	ドルガン語	ヤクート語	エベンキ語
1	<i>bīr</i>	<i>bīr</i>	<i>umūn, umūkən</i>
2	<i>ikki</i>	<i>ikki</i>	<i>djār</i>
3	<i>ūs</i>	<i>ūs</i>	<i>ilan</i>
4	<i>tüört</i>	<i>tüört</i>	<i>dīgin</i>
5	<i>bies</i>	<i>bies</i>	<i>tunğa</i>
6	<i>alta</i>	<i>alta</i>	<i>njujun</i>
7	<i>hette</i>	<i>sette</i>	<i>nadan</i>
8	<i>agīs</i>	<i>aγīs</i>	<i>djapkun</i>
9	<i>togus</i>	<i>toγus</i>	<i>egin</i>
10	<i>uon</i>	<i>uon</i>	<i>djān</i>

20	hūrbe	sūrbe	djurdjār
30	otut	otut	ilandjār

ところが、11から29(20を除く)については、標準ヤクート語と形成法が異なる。ドルガン語は、11から29の個数詞については *orduk*(<チュ. *artuq*)「余り、～以上」に3人称の所有接尾辞をつけて表す。これをヤクート語と対照すると：

	ドルガン語	ヤクート語	エベンキ語
11	uon orduga bir	uon bir	djān umān
12	uon orduga ikki	uon ikki	djān djūr
25	hūrbe orduga bies	sūrbe bies	djurdjār tunḡa
33	otut üs	otut üs	ilandjār ilan

Убрятова (1985: p. 136)は、Пекарский, Э. К., Радлов, В. В.の見解に基づき、この*orduk*を用いた形式は、ヤクート語の方言にのみ見られるものであると記している。一方、Харитонов (1982: p. 176)によると、この*orduk*による形式に似た数の表現法がオルホン碑文にみられるという。そこでは、*otuz artuki bir*「31」といった数が記されている。Харитонов (1982: p. 176)は、このような数の数え方は古風で10進法の習得の初期の段階に典型的であると述べている。ドルガン語は、標準ヤクート語に在った形式を「11」から「29」までの数詞についてのみ *orduk* を用いる点以外は、ほぼそのまま継承している。尚、ヤクート語は他のチュルク諸語に広く知られている *biḡ* (*biḡ*, *miḡ*)⁽¹²⁾「千」や、古くは、モンゴル語や、いくつかのチュルク諸語に知られていた *tümān*「万」を欠く(Харитонов (1982: p. 175))。「千」については、ヤクート語では、*tihīnca* をロシア語 (*tysjača*) から借用している。ドルガン語でも同じくロシア語からの借用語で表現する。*orduk* を用いた形式が、Харитонов (1982)の言うように10進法に慣れていない話者の数え方だとすると、ヤクート語の方言にこの数え方がみられるのは、あるいは、ヤクート語がリング・フランカとして勢力を持っていたシベリアで、ヤクート語を母語としない民族が、標準ヤクート語にあるような規範的な数え方よりも *orduk* を使うやや簡単な

表現を好んだため方言に残っていると考えることもできる。Харитонов(1982: p. 176)では、「31」以上の数詞についても *orduk* を使う表現の例をヤクート語の方言としてあげているが、ドルガン語では「11」から「29」の数詞に限られる。使用頻度が高いものについて、この形式が残っていると考えて良いかも知れない。

方角名称を、本稿で取り上げたのは、ドルガン語の方角名称には、ドルガン族形成の歴史を反映していると考えられる点が見いだせたからである。そして、上でみてきた四つの言語間の接触が、よく伺えるからである。ドルガン語の方角名称をヤクート語と比べると：

	古代ウイグル語	ドルガン語	ヤクート語	エベンキ語	ロシア語
東	öŋdün	allara	ilin (<<ヤ. ilin 「前」) ⁽¹³⁾	vostok	vostok
西	kädin	häppat	arġā (<<ヤ. arġā 「後ろ」) ⁽¹⁴⁾	zapad
南	kündün ⁽¹⁴⁾	soġurū (<<ヤ. soġurū 「中心」)	jug	jug
北	taɣdīn	muora diek	xotu (<<ヤ. xotu 「～沿って」)	sever	sever

ドルガン語の *allara*、及び *muora diek* という語彙は、ヤクート語の諸方言に広くみられるものではない。ドルガン語で「東」を表す *allara* という語彙は、ドルガン語から、かなり東方へ隔たったインジギルカ河上流域で使用されているヤクート語モムスク方言⁽¹⁵⁾において「北」の意での使用がある。ヤクート語で「東」*ilin* を表す方言語彙としては、ドルガン語 *allara* しか、『8500』には挙げられていない。一方、ドルガン語で「北」の意を表す *muora diek* は、ドルガン語のみで使用されている。これは、*muora* のみで「ツンドラ」の意となるのでヤクート語の後置詞 *dieki* 「～の方向へ」をつけて二次的に作られた表現であろう。この *muora* 「ツンドラ」にあたる語は、ドルガン語の

他に、ヤクート語エセイ方言、そして、これらからは、やはり、かなり東方へ隔たったウスチヤンスク地方コルイマ河上流域のベルフネ・コルイマ地方において使用がみられる。

Долгих (1963)によると、17世紀に、オホーツク海沿岸域で遊牧をしていたドルガン氏族のツングース族は、現在のエベン族(ラムート族)の1部分の人人の祖先であり、ドルガン族の形成には、直接には関与していないという。更に、Долгих(1963)は、全てのドルガン族に「ドルガン」の名を与えたドルガン氏族は、ロシア人が、17世紀にレナ川流域で出会ったツングース族の人々であったとしている(p. 107)。しかしながら、上でみた方角名称から推察するに、地理的には現在は隔たってしまったているが、ドルガン語とこれらのヤクーチアの北東部に位置する方言と直接的なつながりがあったことは、否定できない。

4. ドルガン語の語頭子音 h

ドルガン語に入ったロシア語の語彙をスケールにして、ドルガン語の音韻的特徴の変化を探ることが可能であることを本章では指摘したい。外ツンドラ農民のロシア語からドルガン語に入った語彙と、革命後、ロシア人入植者の言語からドルガン語に入った語彙にその可能性を見ることができる。

ドルガン語がヤクート語と一致しない点の一つとして、ドルガン語では語頭に h を持つ語彙があるという点を上にあげた(2.2)。ヤクート語では、h は、母音間には現れるが、語頭には、少数の特殊な語彙を除いては⁽¹⁶⁾あらわれない。上にあげたドルガン語の語彙には、#s- も #h- も現れるが、本稿で扱った資料のみから、その分布の状況を詳らかにすることは難しい。しかしながら、ドルガン語では、ヤクート語やロシア語の #s- を #h- に対応させてドルガン語の語彙として取り込んでいることからみても #s- に対して #h- が優勢であったことがわかる。Убрятова (1985: p. 31ff) は、ヤクート語の h ~ s についての先行の研究もふまえて、ドルガン語の #s- の歴史は斉一的に扱えるものではないとしている。特に、エベンキ語の方言の中に、#h- を特徴とする方言があり、それ

とドルガン語における #h- を結び付けることの可能性を述べている。『8500』で見ると、#h- を持つ方言語彙は、ヤクーツアの北西部及び北東部に分布している。これら地域では、ヤクーツ語とツングース系言語（エベンキ語やエベン語）との接触が密であったと考えられる。又、ドルガン語がヤクーツ語の o 化方言と近い言語であったことからドルガン語における #s → #h という特徴は、エベンキ語の影響による可能性は高い。

ドルガン語のロシア語起源の語彙には、#s が他の摩擦・破擦音類も含め、一方、#h になっているものと、ロシア語の #s- を #s- として取り込んでいる語彙がある。『8500』においては、ロシア語起源の語彙で #s- を #h- としているものは10語、一方 #s- をそのまま保存しているロシア語起源の語彙は収録されていない。Убрятова (1985) は、#s- を保存しているロシア語起源の単語を若干数あげている。これらは、seb'et 「ソヴェート(議会)」等、革命以後ドルガン語に入ったと思われる語彙や、人名である。それらロシア語起源の語彙が、ドルガン語に組み込まれた時期を #h- と #s- の分布にみることができる。このことは、ドルガン語とロシア語の接触状況の相違 (2.1) を反映しているといえる。

4. 1. 語頭に h を持つドルガン語の語彙 (ロシア語からの語彙を中心に)

- ① ヤクーツ語にも同じロシア語の語彙からの借用語彙として入っているもの。

ロシア語	ドルガン語	ヤクーツ語	意味
sapogi	hapagi	sapiki	「長靴」
satın	hatin	satin	「襦子」
sitec	hisse	sides	「更紗」
sito	hite	sīde	「(ド.ヤ.)焼き網」 「(ロ.)ふるい, 格子」
smola	himalā	simala	「樹脂, タール」

soldat	haldät	sallät	「兵隊」
sukno	hūkna	sukuna	「羅紗」
suška	hūska	sūska	「ビスケット」
suxar'	hukār	sūxara	「乾パン」
šal'	hāl	sāl	「ショール」
šolk	holko	solko	「絹」
zaklad	haklät	saklät	「賭」
zakuska	hakūska	sokūska	「前菜」
celkovyj	holkobaj	solkuobaj	「1 ループル； (古語)ループル銀貨」

- ② ヤクート語には、(同じ) ロシア語からの 借用語彙として入っていない
と考えられるもの

ロシア語	ドルガン語	ヤクート語	
sanki	hāṅkī	salaska	「そり(指小)」
saf'jan	happijān	taba kura	「モロッコ革」
šapka	hāpkī	bergehe	「帽子」
šnur	hunūr	ihīrinñik	「編みひも」
		(<<ロ, žirnik)	
zapad	hāppat	arγā	「西」
zarplata	harpīlät	xamnas	「賃金」

これらの他にも、ヤクート語、エベンキ語の語彙のほとんどの #s- を #h-
としてドルガン語は取り入れている。

4. 2. 語頭に s を持つドルガン語の語彙

- ① ヤクート語と来源を同じくするドルガン語の語彙

ドルガン語	ヤクート語	意味
sagīna	saγana	「間に合って」

sahar-	sahar-	「黄色くなる」
saharkaj	saharxaj	「黄色い、橙々色の」
silien	čilien	「成員」
site	site	「(動詞の否定形と共に) ～に至らない」
sie-	sie-	「食べる」
sir anna	sir anna	「地下」
surnāl	surunāl	「雑誌」
suruj-	suruj-	「書く」
surujūhut	surujačči	「作家、記者」
sirīt-	sirīt-	「行く、訪れる」
seb'let	sübe	「ソヴェート(議会)」

これらのうちには、ロシア語からの借用語「成員」(くロ. člen), 「雑誌」(くロ. žurnal), 「ソヴェート(議会)」(くロ. sovet)や、チュルク語にさかのぼる語彙, 「食べる」(くチュ. je-), 「地下」(sir は, チュ. jir にさかのぼる), 「行く, 訪れる」(くチュ. jürüt-)や, 「書く」のように蒙古語(jiru-)にさかのぼるものもある。

② ヤクート語と来源を異にする形式を持つドルガン語の語彙

ドルガン語	ヤクート語	意味
sadanña	sorudax	「課題(ロ. zadanie)」
sadāča	bojobuoj soruk	「問題(ロ. zadača)」
surullar	araspänña	「姓」
sīlāx munnu	lāmī andīta	「くろがも」
seti xosobuoj	silis sīarγa	「そりの一種」

その他, ドルガン語に#s-のある形式は, ロシア語からの人名において, sūkin (ロ. Šukin), suslap (ロ. Suslov), sidēlnikep (ロ. Sidel'nikov)等がある。

4. 3. 「#s- → #h-」の消失

上で挙げた語彙をみると、次の点に注意が惹かれる。

i) ドルガン語において #s- を保存しているロシア語からの借用語彙は、比較的新しいものにみられる。

ii) ドルガン語の語頭の h に関して、ヤクート語は、直接的には関与していない。何故ならば、ヤクート語に同じロシア語からの語彙があるか否かにかかわらず、ドルガン語では、ロシア語の語彙の語頭音、s, š, z を h に置き換えているからである。

上にあげた例の中でも、ド (ルガン語) häppat : ロ (シア語) zapad 「西」やド. häpkī : ロ. šapka 「帽子」は、ヤクート語内で全く異なる語彙を持っているので、おそらくヤクート語を経由せずに外ツンドラ農民によりもたらされ、ドルガン語に受け入れられたのであろう。従って、ドルガン語形成に関与した外ツンドラ農民のロシア語は、他の言語からの語彙と同じく全面的に #s → #h というルールを適用され、4.1. のような形式となった。一方、比較的新しい時代になってからの借用語彙である、ド. surnal : ロ. žurnal 「雑誌」、ド. seb'et : ロ. sovet 「ソヴェート」などに現れる語頭音の s をどう考えればよいのだろうか。このことは、初期のドルガン語とロシア語が接触した時期には効力を持っていた「#s → #h-」というルールが、革命後のドルガン語とロシア語の接触の時期にはすでに効力を失っていることを示している。1章に記したように、ドルガン族のロシア語習得率は急速にのびている (1979年で、72.9% がロシア語を第2言語として自由に操るといふ状況にある)。ドルガン語においては、#s- がやがて完全に受容されるに至るのではないかと考えることが可能である。このように、ドルガン語に入ったロシア語起源の語彙により、ドルガン語の語頭の s と h の分布の変遷がみてとれる。とはいえ、sie- (ドルガン語、ヤクート語共に「食べる」の意)、sirīt- (同上、「行く、訪れる」) 等が基本的な動詞であるにもかかわらず、ドルガン語において、#s- を保ったままであることが疑問として残る。⁽¹⁷⁾ ヤクート語において、#j → #s のため #s- になった

#s- は、ロシア語から入った #s- と音色が異なっていたのではないか。sie-, sirit- のような、チュルク語から発展してきたヤクート語の語彙にドルガン語でhが立たないのは、何か音声的な理由があったのであろうか。これらについては、更にエベンキ語諸方言、ヤクート語諸方言のドルガン語形成への関与状況の点をも含め、詳細な検討を要する。

5. ドルガン語の命令形

ドルガン語の命令形の形式には、現在のヤクート語との相違が若干見られる。その相違の起因するところは、ドルガン語とヤクート語が分岐した時期のヤクート語の形式がドルガン語の形式に反映されているためとみることができる。しかしながら、その一方で、ドルガン語の成立に係わった諸言語の中にその起因するところを見いだせる可能性もある。

ヤクート語とドルガン語の命令形における差異をみる前にヤクート語の命令形について次の点に注意を向けたい。

ヤクート語における命令形の形式は、他のチュルク語（ドルガン語を除く）と異なり2つの時制（近未来時制「～せよ」と遠未来時制「あとで～せよ」）を区別する（cf. Я. Ha. СССР II.）。この2つの時制の存在は、Böhtlingk (1851)が命令形について現在時制・未来時制の2時制を記述して以降その記述が踏襲されている。⁽¹⁹⁾ 以下にヤクート語の命令形のパラダイムを掲げる。

ヤクート語 (Я. Ha. СССР II.: p. 415)

il- 「取る」

《近未来（現在）時制》

sg. 1. il-īm

2. il

3. il-lin

《遠未来（未来）時制》

sg. 2. il-ār

3. il-īaxtīn

pl. 1. il-īax (除外形)

il-īaγīŋ (包括形)

2. il-īŋ

pl. 2. il-ārīŋ

3. il-līnar

3. il-īaxtīnnar

ヤクート語の遠未来の形式は、Böhtlingk (1851)やKałuzyński (1962)の言うように、丁寧な命令を表すブリヤート語 -ār(aj) からの借用であろう。その -ār は、ヤクート語では、遠未来の時制を持った命令表現となるが、この文法範疇は、どこに由来を持つのであろうか。

本稿では、ヤクート語の命令形遠未来時制の由来をヤクート語が、密な接触を持ったツングース系の言語、特にエベンキ語に求めうると考える。エベンキ語の命令形は、満州語を除く他のツングース系諸言語と同じく2時制、即ち近未来、遠未来の時制を持つ。以下にエベンキ語のパラダイムを掲げる。

エベンキ語 (Я. Ha. СССР V.: p. 80)

ana- 「突く」

《近未来》

sg. 1. ana-kta

2. ana-kal

3. ana-gin

pl. 1. ana-kvun (除外)

ana-gat (包括)

2. ana-kallu

3. ana-ktin

《遠未来》

sg. 1. ana-ŋnā-m

2. ana-dāvī

3. ana-ŋnā-n

pl. 1. ana-ŋnā-vun (除外)

ana-ŋnā-t (包括)

2. ana-dāvēr

3. ana-ŋnā-tīn

パラダイムを見ると、2時制とも、1～3人称単数複数についての形式を持ち、1人称複数については、除外・包括、各々の形式を持つ。但し、遠未来の形式は、-ŋnā- と、-dāv- の2系統の接辞による。前者は1、3人称についてであり、後者は2人称についてである。1、3人称単数、複数に各々該当する形式

は、生産的な人称接辞（即ち、直接法など、他の法についても、広く付加される人称接辞）を付加することによって得られる。一方、近未来時制は、直接法などの他の法での動詞の形式とは異なり、生産的な人称接辞と組合わさることなしに、各々の形式を形成している。この点は、エベンキ語の動詞変化全体から考えると命令の形式について特徴的である。

エベンキ語の命令形のエベンキ語内の特異性はさておき、ヤクート語の使用者が、長期間に亘り、ツングース語の使用者と接触していたという民族学からの情報を考慮すれば（17世紀の民族分布図を参照）次のような仮説を立てることが可能であろう。ヤクート語には命令形として本来的な近未来形があったが、その他に、ブリヤート語もしくは他のモンゴル系言語から借用した接尾辞 *-är* によりつくられる命令表現（おそらく、えん曲表現）の形式があったのであろう。ヤクート語の *-är* によるこの形式がエベンキ語とヤクート語の接触によりヤクート語の中で、命令表現のうち、「後で～せよ」という意味を専ら司るようになる。そして、これが、後に Böhrtlingk(1851)により、「未来（遠未来）時制」として1パラダイムを形成すると解釈されるに至ったのではないか。即ち、古い時代のヤクート語が、モンゴル系言語と接触し、その形態を借用する。後に、ツングース系言語と接触したことによってその文法範疇を変えることになる。

ここまでは、ヤクート語とエベンキ語の命令形について主に触れてきたが、ヤクート語においては、文献史料を古くさかのぼることができないので、今日、近・遠未来の2つの時制を持つ命令形が、どのように使われてきたのかを実際に観察することは難しい。しかしながら、18～19世紀初に、標準ヤクート語から隔たってしまったドルガン語の命令形は、このヤクート語の命令形をどのように発展させたのであろうか、あるいは、古いヤクート語の形式を残しているのであろうか、これらの点について以下でみていきたい。

ドルガン語がヤクート語から継承した命令形には、上述の両時制と1人称複数形に除外・包括の2形がある。

ドルガン語 (Убрятова: 1985, pp. 178-83)

bar- 「行く」

《近未来》

《遠未来》

sg. 1. bar-īm

2. bar

sg. 2. bar-ār

3. bar-dīn

pl. 1. bar-īak (除外形)

bar-īagīŋ (包括形)

2. bar-īŋ

pl. 2. bar-ār-īŋ

3. bar-dīnnar

このドルガン語の命令形のパラダイムとヤクート語の命令形を比べると、最も目立つのは、ヤクート語の命令形遠未来時制が、2人称と3人称を持ち、ドルガン語の遠未来時制が、2人称のみであると記述されている点である。

ヤクート語がツングース系言語と接触した結果、形成したと推定できる命令形が、ドルガン語成立の過程において、プロト・ドルガン語がエベンキ語と「再」接触し、標準ヤクート語と隔たった地域・環境で、どのように変化したか、又、その結果、生じた差異を言語接触の観点から説明できないであろうか。ここで、注目すべきは、Убрятова(1985)がドルガン語の命令法の中に周辺のなものとして含めているもう1つのパラダイムである。これは、接辞 *-iakti-* により形成される形で、「依頼や事前の打ち合せにより行われる行為」について使われる。このドルガン語のパラダイムは、1~3人称単・複各々の形式をそろえている。ヤクート語のパラダイムを見ると、この中の3人称の形が、遠未来時制に組み込まれている。

ドルガン語 《*-iakti* による命令形のパラダイム》 (Убрятова: 1985, p. 182)

bar- 「行く」

sg. 1. bar-*iakti*-bīn

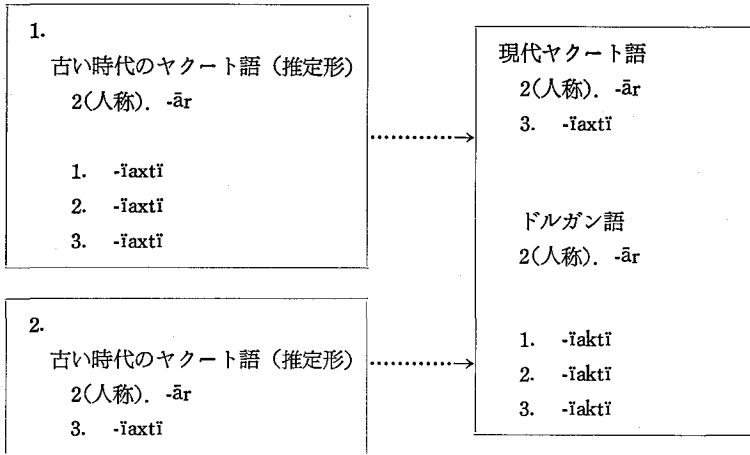
2. bar-ïakti-gin
 3. bar-ïakti-n
- pl. 1. bar-ïakti-bit
2. bar-ïakti-git
 3. bar-ïakti-nnar

ヤクート語の遠未来時制のドルガン語における発展については、次の2つの可能性がある。

1. ヤクート語がツングース系言語と接触した時期に形成された命令法には、遠未来時制の形式として、-är により形成される形式（2人称）があり、その他に -ïaxti による形式（1～3人称）が、命令法の周辺的な形式として存在していた。ドルガン語形成時期にタイムル半島で使われていたヤクート語は、この時期のヤクート語を反映しており、痕跡形として、この地域で保存され、現在のドルガン語に組み込まれた。もちろん、その保存を促す要因としては、ドルガン語の形成に深く関わったと思われるエベンキ語の存在が大きい。

2. ドルガン語の形成に係わった時期のヤクート語には、現在のヤクート語と同じく遠未来形は、2人称の-ärによる形の他、3人称に -ïaxti が存在していた。ドルガン語の形成時期に係わったエベンキ語が、-ïaxti を再解釈し、1～3人称を表す別の命令表現のパラダイムを形成した。ただ、その命令表現が、「依頼や事前の打ち合せによる命令」の意味を持つようになった過程については、明確に述べられない。詳しく調査すれば、あるいは、この表現が、遠未来の第2形として扱えるものであるかもしれない。1, 2をまとめると以下の図になる。

ドルガン語が、遠未来命令形として2人称のみをもつということについては、次のように考察を進めることができる。ツングース系言語の遠未来形のパラダイムを概観すると、1～3人称のパラダイムのうち、1, 3人称は、動詞の語根に命令表現の接辞をつけて、その後、「生産的な」人称接辞をつける。それに対して、2人称は、「生産的な」接辞を伴わない命令表現の別の形



態を用いる。このことは、ツングース系言語における命令形の遠未来形が、本来的ではなく、後に発達してきた可能性も示す。しかも、それらは、必ずしも十分に定着しうるものではなかったのであろう。例えば、ネギダル語では、命令形の遠未来形は2人称にしか現れない。このことと並行的にドルガン語の遠未来形2人称 -ār のみが、遠未来形表現として定着したと考える。

上の2つの可能性のうちどちらが蓋然性が高いかを決定することは、今の段階ではできない。しかしながら、いずれにしても、ドルガン語とヤクート語の命令形の形式における差異、とりわけドルガン語が、-iaktī による1～3人称のパラダイムを持つことは、ヤクート語が、ドルガン語の成立過程において、エベンキ語と「再」接触したことに起因することを如実に物語っている。

6. おわりに

本稿においては、北方シベリアの少数民族の言語ドルガン語について、その成立に関与した諸言語の影響が、観察されるいくつかの点について報告してきた。そして更に、ドルガン語とヤクート語の相違点について、その起因するところを言語接触の観点から説明しようと試みた。

多くの言語が、様々な状況で接触したであろうシベリアにおいては、言語接

触の痕跡を豊富に観察することが可能である。本稿では、その言語間の接触のほんの一部を示したに過ぎないが、ここにおいてさえ複雑に接触を繰り返す言語のあり方を見ることができた。今後、更に多くの言語からの情報がもたらされれば、この地域に特徴的な言語特性を見いださるかも知れない。

註

- (1) Долгих(1963: p. 126~128)によると、1926-27年のドルガン人の民族構成は、ツングース族 50~52%, ヤクート族30~33%, ロシア人15%, サモエード人(エネツ・ネネツ族) 3~4%であったという。又、言語の面からは、19世紀のはじめには、ほぼ60%がヤクート語を、20%がツングース語を、更に20%がロシア語を使用していたという。
- (2) 近年、ドルガン族出身の女性詩人 Огдо Аксенова が、ドルガン語のアルファベットを作成し、初等教育用の教科書を編んだ。このアルファベットは、認められつつあるという(Крюкова(1986))。
- (3) Akiner:1986² を参照。
- (4) 本稿でドルガン語の資料としたのは、Убрятова(1985)で提出されたもの(1932-37年にかけて、Убрятова, Е.И. がタイムル半島ノリリスクを中心とした地域で収録した資料)及び、Афанасьев et al.(1976)『ヤクート語方言辞典(『8500』語)』の中に記載されたもの(1964年に行われた民話・方言調査の際の資料に基づく語彙)である。Афанасьев et al.(1976)『ヤクート語方言辞典(8500語)』を本稿では、以下、略して、『8500』とする。
- (5) ドルガン語におけるエベンキ語の影響の1つと考えられるものに o(オー)化方言(окающий диалект)がある。ヤクート語の方言の語彙に、円唇・非円唇のバリエントを持つものがある。各々を、o 化現象(оканье), a 化現象(аканье)という。
- | | | |
|--------|--------|-------|
| o 化 | a 化 | |
| xotun- | xaťin- | 「女主人」 |
| doidu | dajdi | 「国」等 |
- ドルガン語は、両バリエントを持つ単語のうち、o 化したバリエントのみを有している。従って、ドルガン語は、o 化方言に近い言語である。
- Романова et al.(1975)は、ヤクート語の中の o 化及び a 化の両バリエントの存在を、エベンキ人の o 化方言とエベン人の a 化方言の接近によって説明を試みている(p. 28)。
- (6) 外ツンドラ農民(затундринские крестьяне): 17世紀から18世紀に、エニセイ河下流地方及びピャシナ河、ドッドゥイプタ河、ボガニダ河、ハタンガ河、ヘタ河流域に移住した、ロシア人商人、町人、役人らの子孫である。19世紀の初めに、彼らは主としてトナカイ飼育に従事していたという。ヤクート語を身につけ、ドルガン人や、部分的には北方のヤクート人に同化した。
- (Большая советская энциклопедия т. 9: p.388)
- (7) dolgan は、今日ソ連邦で使われている公式の民族名称であり、より正確には、dulgan である(Убрятова, 1985: p. 7)。
- (8) ドルガン語とヤクート語の関係について、Романова et al.(1979:p. 27) は、ヤクート語が

エベンキ語に及ぼした影響はその逆の影響よりも圧倒的に優勢であるとのべている。

(9) 2.2. に記す頁は、特に断わらない限り、Убрятова(1985)の頁である。

(10) ドルガン語は、ヤクート語と同じく 8 母音である。

非円唇母音		円唇母音	
i ——— ĭ	ü ——— u		
e ——— a	ö ——— o		

これらと同種の長母音がある。

二重母音もヤクート語と同じく、4 つある：

ia, uo, ie, üö.

ドルガン語の子音は、次表の通りである。

調音点 調音法		調音点		両唇音	前舌音	中舌音	後舌音	後口蓋音	咽頭音
		両唇音	前舌音	中舌音	後舌音	後口蓋音	咽頭音		
閉鎖音	鳴音	m	n	ŋ	ŋ				
	騷音	b, p	d, t	d', t'	g	ɣ, k			
摩擦音	破擦音			j, č					
	騷音		s					h	
	鳴音			j					
	側音		l						
	ふるえ音		r						

(Убрятова(1985):p. 24に基づく.)

(11) kirinŋeŋ 「受け入れの」の意。

(12) Харитонов(1982)は、「千」を mun(mīn,men)としている。

(13) チュルク語本来の「前」ilgärü と関係がある可能性もある。

(14) 欠けている語彙があるのは、おそらくは資料不足のためであろう。

(15) モムスク地区の中心は、ホヌ Хону であり、インジギルカ河右岸に在る。

(地図 I ナンバー19参照)

(16) 例：haj 「(角のある家畜を追うときのかけ声)」

hat 「(馬を追うときのかけ声)」

huk 「(突然であることに驚く感嘆詞)」(Слепцов：1972)

(17) Убрятова(1985:p.31)は、語頭の s が保たれている例としてコルホーズ員の戯歌をあげているが、これは彼が強くロシア語の影響をうけたことにより語頭の h を失ったと考えるための好例である。

(18) ヤクート語の #s- がドルガン語で #h- になった例も見られる。

	「春」	「ちょうど」	「洗濯する」	「徒順な」
ド.	hās	hitičče	hot	himnagas
ヤ.	sās	sitičče	sot	sīmnagas

これらについては、ヤクート語の単語が、直接にドルガン語に入ったのではなく、ヤクート語の #s- を #h- に対応させるエベンキ語方言を経由した可能性なども考えられる。

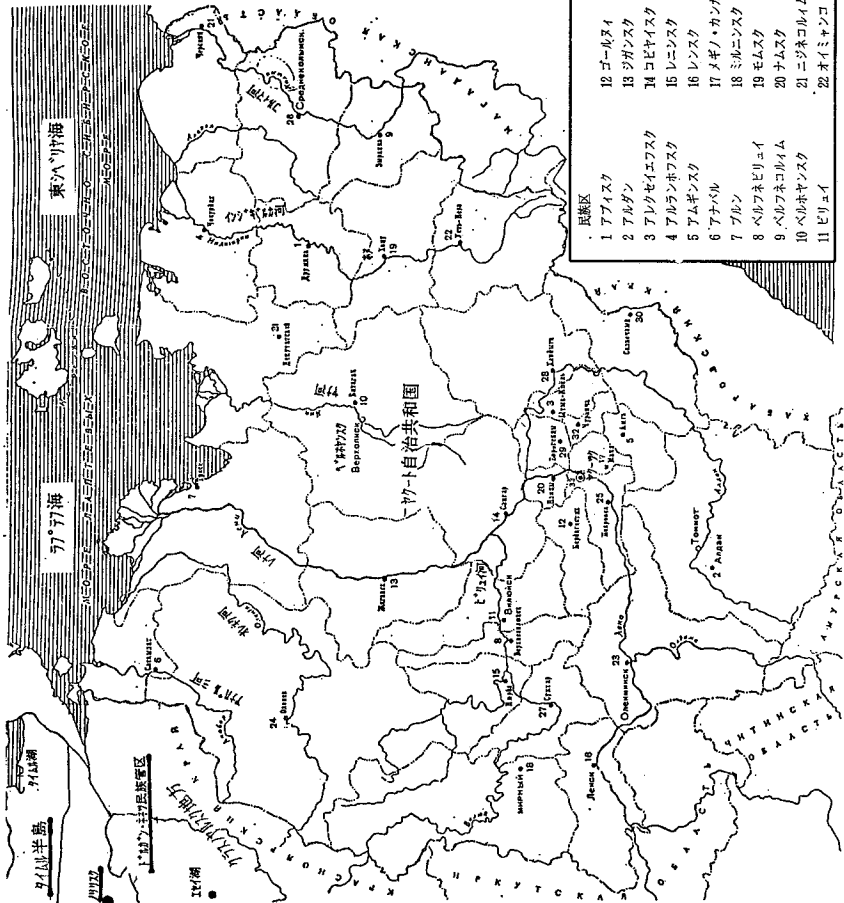
(19) 他のチュルク系言語の命令形から外れた形式として、1人称複数に2つの形式があることが

あげられる。パラダイムの中の一人称複数²の2つの形式を巡って研究者間に異なった見方がある(包括的1人称複数と除外的1人称複数とする見解(Убрятова 1966, 1985), と2つの形式のうちの1つを双数とする見解(Коркина et al.(1982))。]

参 考 文 献

- Афанасьев, П. С. & Л. Н. Харитонов (1968) *Русско-якутский словарь; около 28500 слов*, Советская Энциклопедия, Москва.
- Афанасьев, П. С., М. С. Воронкин, & М. П. Алексеев (1976) *Саха тылын диалектологической тылдьыта, 8500 Тахса тыллаах (Диалектологический словарь якутского языка)[[8500]]*, Наука, Москва.
- Болдырев, Б. В. (1988) *Русско-эвенкийский словарь*, Русский язык, Москва.
- Большая советская энциклопедия*, т. 9. (1972), Советская Энциклопедия, Москва.
- Бромлей, Ю. В. (ред.) (1988) *Народы мира*, Советская Энциклопедия, Москва.
- Долгих, Б. О. (1963) “Происхождение долган,” *Сибирский этнографический сборник*, т.5., 92-141, Москва.
- Константинова, О. А. (1968) “Эвенкийский язык,” *Языки народов СССР V. Монгольские, тунгуско-маньчжурские и палеоазиатские языки*, Наука, Ленинград.
- Коркина, Е. И. et al. (1982) *Грамматика современного якутского литературного языка*, Наука, Москва.
- Крюкова, Н. (1986) “Песни северного сияния,” *Спутник* 11, 108-112, Агентство печати новости, Москва.
- Лебедев, В. Д. (1978) *Язык Эвенов Якутии*, Наука, Ленинград.
- Левин, М. Г. & Л. П. Попов (ред.) (1961) *Историко-этнографический Атлас Сибири*, АН СССР, Москва-Ленинград.
- Пекарский, Э. К. (1907-1930) *Словарь якутского языка* т. I-III. Спб. -Пг. Ленинград. [АН СССР (1958), Якутск.]
- Попов, А. А. (1946) “Семейная жизнь у долган,” *Советская этнография* No.4, 50-74.
- Романова, А. В. & А. Н. Мыреева (1968) *Диалектологический словарь эвенкийского языка*, Наука, Ленинград.
- Романова, А. В., А. Н. Мыреева, & П. П. Барашков (1975) *Взаимовлияние эвенкийского и якутского языков*, Наука, Ленинград.
- Скорик, П. Я. (1986) *Палеоазиатские языки*, Наука, Ленинград.
- Слепцов, П. А. (ред.) (1972) *Якутско-русский словарь, 25300 слов*, Советская Энциклопедия, Москва.

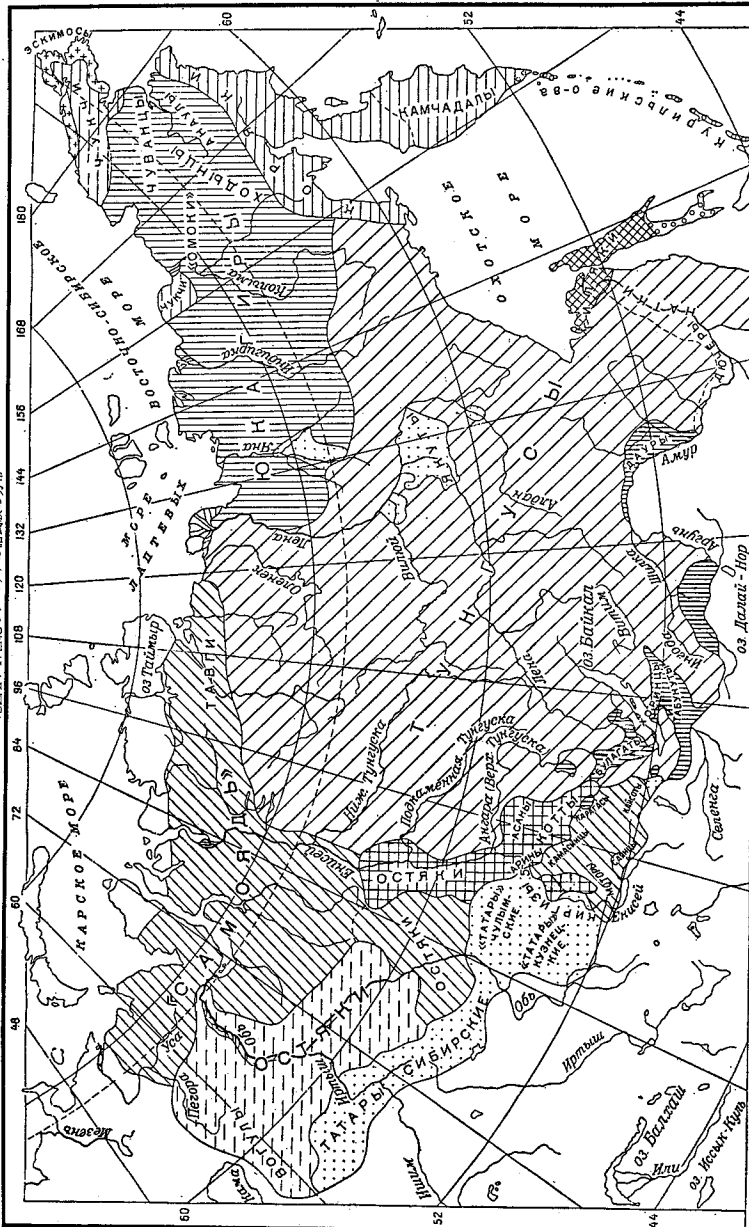
- Слепцов, П. А. (1975) *Русские лексические заимствования в якутском языке*, Наука, Москва.
- Убрятова, Е. И. (1966) “Якутский язык,” *Языки народов СССР* II. Тюркские языки, 403-427, Москва.
- _____ (1985) *Язык норильских долган*. «Наука», Новооибирск.
- Харитонов, Л. Н. (1982) “Имя числительное”, *Грамматика современного якутского литературного языка*, 174-187, Наука, Москва.
- Центральное Статистическое Управление СССР (1984) *Численность и состав населения СССР*, Финансы и статистика, Москва.
- Цинциус, В. И. (1975) *Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков*, Наука, Ленинград.
- Щербак, А. М. (1980) *Очерки по сравнительной морфологии тюркских языков (Глагол)*, Ленинград.
- Языки народов* [Я. На.] СССР II, *Тюркские языки* (1966), Наука, Москва.
- Языки народов* [Я. На.] СССР V, *Монгольские, тунгусо-маньчжурские языки* (1968), Наука, Ленинград.
- Akner, S. (1986²) *Islamic peoples of the Soviet Union*, KPI, London.
- Böhtlingk, O. (1851) *Über die Sprache der Jakuten*, St. Petersburg (Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series vol. 135 (1964))
- Kałużyński, St. (1962) *Mongolische Elemente in der jakutischen Sprache*, Warszawa.
- Popov, A. A. (1966) *The Nganasan*, Indiana University Publications, Bloomington.
- _____ (1964) “The dolgans,” in Levin M. G. & L. P. Potapov (eds.) *The people of Siberia*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Poppe, N. (1965) *Introduction to Altaic linguistics*, Otto Harrassowitz, Wisbaden.
- ハールマン・ハラルト (早稲田みか編訳) (1985) 『言語生態学』, 大修館書店, 東京.
- 池上二良 (1955) 「トゥングース語」市河三喜・服部四郎共編『世界言語概説』下巻, 441-487, 研究社, 東京.
- 庄垣内正弘 (1983) 「ヤクート語」『言語』vol. 12, No. 11, 80-86, 大修館書店, 東京.
- _____ (1984) 「『畏兀児館譯語』の研究—明代ウイグル口語の再構—」『内陸アジア言語の研究』I, 神戸市外国語大学外国学研究所, 神戸.
- 津曲敏郎 (1983) 「ツングース語」『言語』vol. 12, No. 11, 72-78, 大修館書店, 東京.



- 行政区
- | | | | |
|----|------------|----|--------------|
| 1 | アバイスク | 23 | ネレクミンスク |
| 2 | アルダン | 24 | オレネク |
| 3 | アルクセイエフスク | 25 | オレゾフニキセ |
| 4 | アルランホフスク | 26 | スレドネコルイム |
| 5 | アルギンスク | 27 | ストラルスク |
| 6 | アチナル | 28 | トムボンスク |
| 7 | プルン | 29 | ウスチ・アングンスク |
| 8 | ベルフネビリュイ | 30 | ウスチ・マイスク |
| 9 | ベルフネコルイム | 31 | ウスチ・キンスク |
| 10 | ベルホヤンスク | 32 | チュラプチンスク |
| 11 | ビリュイ | 33 | ヤカート・ゴロワグエート |
| 12 | ゴールヌイ | | |
| 13 | ジガンスク | | |
| 14 | コビキンスク | | |
| 15 | レニンスク | | |
| 16 | レンスク | | |
| 17 | メキノ・カンガンスク | | |
| 18 | ミルニンスク | | |
| 19 | モムスク | | |
| 20 | ナムスク | | |
| 21 | ニジネコルイム | | |
| 22 | オイミヤンコ | | |

『850』収録の地図を参考にして作成した。

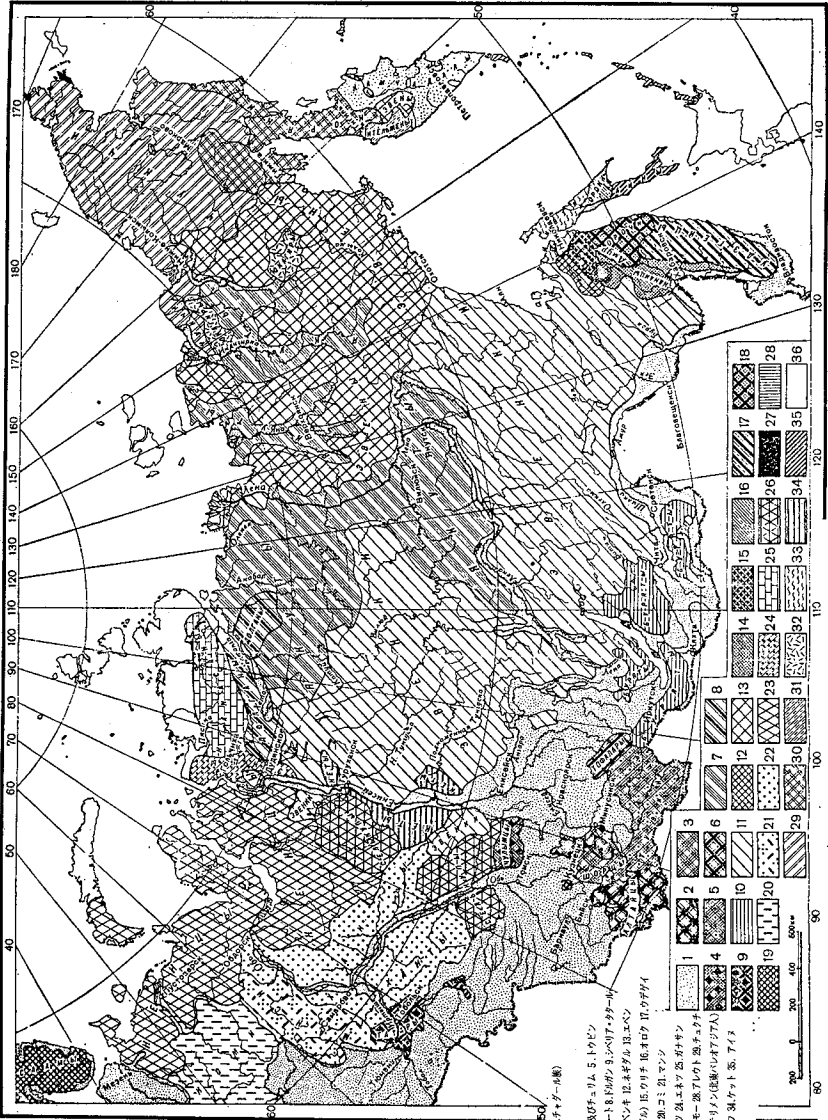
地図Ⅱ. 17世紀のシベリアの諸民族の分布



<table border="0"> <tr> <td>■</td> <td>I</td> <td>トウバシヤク</td> </tr> <tr> <td>■</td> <td>II</td> <td>タタール</td> </tr> <tr> <td>■</td> <td>III</td> <td>シベリヤ</td> </tr> <tr> <td>■</td> <td>IV</td> <td>シベリヤ</td> </tr> <tr> <td>■</td> <td>V</td> <td>シベリヤ</td> </tr> <tr> <td>■</td> <td>VI</td> <td>シベリヤ</td> </tr> <tr> <td>■</td> <td>VII</td> <td>シベリヤ</td> </tr> <tr> <td>■</td> <td>VIII</td> <td>シベリヤ</td> </tr> <tr> <td>■</td> <td>IX</td> <td>シベリヤ</td> </tr> </table>	■	I	トウバシヤク	■	II	タタール	■	III	シベリヤ	■	IV	シベリヤ	■	V	シベリヤ	■	VI	シベリヤ	■	VII	シベリヤ	■	VIII	シベリヤ	■	IX	シベリヤ	<table border="0"> <tr> <td>■</td> <td>X</td> <td>シベリヤ</td> </tr> <tr> <td>■</td> <td>XI</td> <td>シベリヤ</td> </tr> </table>	■	X	シベリヤ	■	XI	シベリヤ	<p> I—チュルク系遊牧民族 II—ウゴル系遊牧民族 III—モンゴル系遊牧民族 IV—北東シベリア人 V—ウカシヤ人 VI—サマエド系遊牧民族 VII—ウラル系遊牧民族 VIII—ウラル系遊牧民族 IX—ウラル系遊牧民族 X—サマエド系遊牧民族 XI—ウラル系遊牧民族 </p>	<p> 1) サモエド人とセリクア人の混血 2) ツングース系遊牧民族とウラル系遊牧民族の混血 3) イチリメン(カムチャツカ人)とコリヤーク人 </p>
■	I	トウバシヤク																																		
■	II	タタール																																		
■	III	シベリヤ																																		
■	IV	シベリヤ																																		
■	V	シベリヤ																																		
■	VI	シベリヤ																																		
■	VII	シベリヤ																																		
■	VIII	シベリヤ																																		
■	IX	シベリヤ																																		
■	X	シベリヤ																																		
■	XI	シベリヤ																																		

Левин, Н. Г. & Л. П. Попов(ред.) (1961)を参考に作成した。

地図面、19世紀・20世紀初のシベリアの諸民族の分布



- 1. ロシヤ人(東部カザフスタン)
- 2. トルコ人
- 3. シベリヤ人
- 4. アムール川流域のシベリヤ人
- 5. トロイツク
- 6. アムール川流域のシベリヤ人
- 7. アムール川流域のシベリヤ人
- 8. アムール川流域のシベリヤ人
- 9. アムール川流域のシベリヤ人
- 10. アムール川流域のシベリヤ人
- 11. アムール川流域のシベリヤ人
- 12. アムール川流域のシベリヤ人
- 13. アムール川流域のシベリヤ人
- 14. アムール川流域のシベリヤ人
- 15. アムール川流域のシベリヤ人
- 16. アムール川流域のシベリヤ人
- 17. アムール川流域のシベリヤ人
- 18. アムール川流域のシベリヤ人
- 19. アムール川流域のシベリヤ人
- 20. アムール川流域のシベリヤ人
- 21. アムール川流域のシベリヤ人
- 22. アムール川流域のシベリヤ人
- 23. アムール川流域のシベリヤ人
- 24. アムール川流域のシベリヤ人
- 25. アムール川流域のシベリヤ人
- 26. アムール川流域のシベリヤ人
- 27. アムール川流域のシベリヤ人
- 28. アムール川流域のシベリヤ人
- 29. アムール川流域のシベリヤ人
- 30. アムール川流域のシベリヤ人
- 31. アムール川流域のシベリヤ人
- 32. アムール川流域のシベリヤ人
- 33. アムール川流域のシベリヤ人
- 34. アムール川流域のシベリヤ人
- 35. アムール川流域のシベリヤ人
- 36. アムール川流域のシベリヤ人

Левин, И. Г. & Л. П. Иванов (ред.) (1961)を参考に作成した。